

# vRealize Automation 8.4 リリース ノート

Add to Library

Feedback

Updated on 04/27/2021

vRealize Automation 8.4 | 2021 年 4 月 15 日

- vRA Easy Installer (ISO) ビルド 17879649
- vRA 製品 (アプライアンス) ビルド 17874359

リリース ノートを定期的に確認して、最新の追加情報や更新情報を入手してください。

## リリース ノートの概要

- [vRealize Automation 8.4 について](#)
- [新機能](#)
- [はじめに](#)
- [既知の問題](#)

## vRealize Automation 8.4 について

vRealize Automation 8.4 では、vRealize Automation 8.3 の機能が強化され、機能面では vRA 7.x リリースに近くなりました。XaaS などの主要な機能を再度導入し、ABX での PowerShell のサポート、vRO での Python、Node.js、PowerShell のサポートを追加しました。

## 新機能

vRealize Automation 8.4 には次のような多くのメリットがあります。

### 連邦情報処理標準 (FIPS) 140-2 への準拠 - SaltStack Config

SaltStack Config は、NIST の FIPS 140-2 Cryptographic Module Validation Program (CMVP) テストに合格済みの暗号化モジュールとともに出荷されるようになりました。これらのモジュールが「FIPS モード」で実行されるように構成されている場合、セキュリティ

機能を実行したり機密性の高いデータを処理したりする製品内の暗号化操作はすべて、これらのモジュールによって処理されます。

注：FIPS モードを有効にするかどうかは、インストール時にのみ選択できます。FIPS モードは現在、グリーンフィールドの SaltStack Config 環境でのみ使用できます。vRealize Automation とともに実行している場合、混合 FIPS モードはサポートされません。

## アクセシビリティの機能強化

Web Content Accessibility Guidelines (WCAG) 2.1 レベル A および AA 標準に従うように、アクセシビリティ拡張機能が大幅に強化されました。vRA 8.4 の VMware アクセシビリティ適合レポートは、2021 年 5 月末の公開を目標にしています。以前の vRA 8.2 バージョンの VMware アクセシビリティ適合レポートについては、<https://www.vmware.com/content/dam/digitalmarketing/vmware/en/pdf/product/vpat/Vmware-vrealize-automation-8.2-vpat.pdf> を参照してください。詳細について、および VMware におけるアクセシビリティへの取り組みをいち早く把握するには、<https://www.vmware.com/help/accessibility.html> をご覧ください。

## ポリシー基準で新たに整数/文字列演算子をサポート

ポリシー基準における整数および文字列ベースの演算子に対するサポートが強化され、クラウド管理者がポリシーをきめ細かく定義できるようになりました。

- 基準句「合計メモリ (MB)」と「CPU 数」に、「より大きい」、「より小さい」、「以上」、「以下」という各整数演算子が導入されました。
- 基準句「作成者」と「所有者」に、文字列演算子「含む」が導入されました。
- 基準句に文字列演算子「正規表現に一致」が導入されました
- 「スナップショットあり」や「電源状態」などのリソース属性で、演算子「等しい」または「等しくない」のブール値 (True/False または On/Off) が使用できるようになりました

## ポリシー基準ですべてのポリシー タイプのリソース タグをサポート

追加基準としてリソース ベースのタグのサポートが強化され、vRA クラウド管理者は、特定のタグを持つリソースを含む展開を対象としたきめ細かいポリシーを定義できます。

リソース タグのポリシー基準は、すべてのポリシー タイプで使用できます。

ネットワーク：vSphere および VMC の既存のセキュリティ グループの再構成 - 反復および Day 2

セキュリティ グループの再構成（Day 2 および反復展開）アクションで、vSphere または VMware Cloud on AWS で実行中のアプリケーションに対して既存のセキュリティ グループのルールを変更、追加、または削除できます。[Day 2 アクション](#)を参照してください。

## ネットワーク：VMC のオンデマンドセキュリティ グループと既存のセキュリティ グループの変更 - 反復および Day 2

セキュリティ グループの変更（Day 2 および反復展開）アクションで、VMware Cloud on AWS 展開の一部であるセキュリティ グループ（既存/新規）を展開内の 1 台以上のマシンに関連付けたり関連付けを解除したりできます。ブループリント内のセキュリティ グループを各マシンに対して適用/解除し、反復型開発を通じてこの新しいトポロジで展開を更新できます。

展開内の 1 台以上のマシンに対して、展開に属していないセキュリティ グループ（既存または新規）を追加する必要がある場合は、ブループリントのセキュリティ グループを追加してマシンに追加（適用）し、反復型開発を通じてこの新しいトポロジで展開を更新できます。[Day 2 アクション](#)を参照してください。

## Ansible Tower でのホスト名の更新

以前は、マシンが vRA によってプロビジョニングされる場合、Ansible Tower ではホスト名ではなくマシンの IP アドレスが追加されていました。このリリースでは、ホスト名が Ansible Tower の `ansible_host` 変数に追加されます。

ホスト名または FQDN 文字列をクラウドテンプレートから Ansible Tower に渡すことができます。

## 複数仮想マシン/ディスク構成のサポート

- 複数のディスクが接続された複数の仮想マシンの作成を指定できます。
- 仮想マシンに作成されたすべてのディスクに対する Day 2 アクションのサポート
- 各仮想マシンに接続されているディスクを簡単に識別できます。

## サイズの異なるディスクの追加

本リリースでは、vRA クラウドテンプレートでサイズの異なるディスクによる構成が可能になります。

## オンボーディングされた展開の展開プロジェクトの変更

オンボーディングされた展開について、Day 2 アクションとしてプロジェクトを変更できます。

- Day 2 アクションは、このリリースでオンボーディングされた展開でのみ使用できます。リリース 8.4 では、オンボーディングできるのはディスクとマシンのみです。オンボーディングされた展開が更新され、プロビジョニング済みのリソースが追加された場合は、プロジェクトの変更アクションは使用できません。プロビジョニング済みリソースを削除すると、プロジェクトの変更アクションが再度使用可能になります。
- 障害が発生した場合、アクションは自動的にロールバックされません。アクションは手動で再度初期化できます。
- 同じリソース クラウドゾーンがターゲット プロジェクト内に置かれている必要があります。そうでない場合、以降の Day 2 アクションが想定どおりに動作しない可能性があります。この前提条件は強制的には適用されません。これは既存のオンボーディング ロジックと一致しています。
- [Day 2 アクション](#)を参照してください。

## vRA のオンプレミス Terraform 環境でプロキシを構成するためのドキュメント

オンプレミスの vRA 8.2 以降で Terraform 実行環境向けプロキシを構成するためのドキュメントを追加しました。

## オンボーディングされたマシンの vRA からの登録解除

オンボーディングされたマシンを vRA から登録解除できるようになりました。

- 登録解除アクションは、「オンボーディングされた」マシンに対してのみ使用可能です。
- このアクションを実行すると、リソースは展開から削除されて、再度オンボーディング フローで使用できるようになります。
- オンボーディングされたマシンを「登録解除」すると、接続されたディスク（マシンとともにオンボーディングされたディスク）は自動的に登録解除されます。
- オンボーディングされたマシンにディスクを追加すると、マシンはオンボーディング済みとして扱われなくなり、登録解除機能は使用できなくなります。

## 単一のシークレット ストア

拡張性アクション シークレットの名前が「アクション定数」に変更されました。

アクション定数では、同じプロジェクト サービス シークレットのリストが共有されます。以前のリリースで既存のアクション定数を使用していたユーザーは、対応する必要はありません。

## 運用センター：カスタム ロールのサポート

インサイト、アラート、最適化を、クラウドゾーン、プロジェクト、展開に対する読み取り専用アクセス権または読み取りおよび書き込みアクセス権を持つカスタムロールによってフィルタリングできるようになりました。

### 運用センター：クラウドゾーンのインサイトの機能強化

クラウドゾーンのインサイトで、プロジェクトとともに再回収可能なキャパシティが表示されるようになりました。

### 運用センター：最適化可能な展開の把握

最適化可能な展開は、展開リストからのフィルタリングによりアクセスしやすくなりました。

### vSphere ディスクでの順序と SCSI コントローラの指定

展開で新しいディスクを作成するときに、次のことが可能です。

- クラウドテンプレートで、ディスクの作成順序を指定できます。これにより、Day 2 アクションでのディスクの識別が向上します。
- クラウドテンプレートでは、ディスクへのマッピングに必要な SCSI コントローラを指定できます。vRA は、展開あたり最大 4 つの SCSI コントローラをサポートし、各ディスクに対し、これらの 4 つの中から選択できます。

### イメージテンプレートに属するディスクのサポート

イメージテンプレートに、起動ディスク以外のディスクがある場合があります。このような場合に、vRA は、Day 2 アクションでこれらのディスクをサポートします。仮想マシンの詳細の下にこれらのディスクが表示され、これらのディスクに対してサイズ変更などの Day 2 アクションを実行できます。このサイズ変更アクションは、展開図上の仮想マシン オブジェクトに対して実行され、仮想マシンに接続しているすべてのディスクが一覧表示されます。[Day 2 アクション](#)を参照してください。

### ディスクの配置をワークロード配置の仮想マシンと一致させる\複数仮想マシンのシナリオ

以前は、1 つの展開内に複数の仮想マシンを（count フィールドを使用して）作成する場合、仮想マシンをホストするクラスタにディスクが配置されない可能性があります。ディスクが必ず仮想マシンをホストするクラスタに配置されることで、パフォーマンスが最適化されるようになりました。

### 仮想マシン全体のサイズによるストレージ割り当て

以前は、テンプレート/コンテンツ ライブラリ ベースの展開に対するストレージの割り当てでは、デフォルトの容量にのみ基づいて割り当てられ、展開後に詳細がすべて判明してからサイズを変更していました。今後、ストレージは、vROps を使用したワークロード配置への影響を避けるため、イメージデータ ディスクを含む展開サイズ全体に対して割り当てられるようになります。これには、テンプレートの一部であるデータ ディスクの容量も含まれます。

## オンボーディング ワークフローの簡素化

オンボーディング プランの作成ワークフローが簡素化され、仮想マシンを vRA の管理下に置きやすくなりました。ルール オプションは廃止され、ワークフローでマシンを直接選択できるようになりました。マシン ビューには、ユーザーによって明示的に選択された仮想マシンのみが表示されます。

## オンボーディング アクションで vSphere ネットワーク インターフェイスをサポート

新しい仮想マシンを vRA にオンボーディングするとき、接続済みの vSphere ネットワーク インターフェイスをオンボーディングの一部として取り込むことができるようになりました。オンボーディングが完了すると、ネットワーク オブジェクトに対して Day 2 アクションを実行することもできます。

## Azure イメージ ギャラリーのサポート

vRA は、イメージ ギャラリーに関する次の機能をサポートします。

- イメージ ギャラリーにあるカスタム イメージを使用したプロビジョニングのサポート
- 複数の Azure サブスクリプションでの同じイメージの使用

## Azure ディスクのスナップショットの管理

Azure 展開でディスクのスナップショットを作成および管理できます。

- スナップショットに対する作成操作をサポート
- 管理対象ディスクと管理対象外ディスクの両方をサポート
- [Day 2 アクション](#)を参照してください。

## Azure ディスク暗号化セットのサポート

Azure ディスク暗号化セットのサポートにより、以下が実現します。

- 暗号化セットを利用するサードパーティ製 KMS システムのサポート

- 仮想マシンおよび接続される（現在および将来の）すべてのディスクを同じキーで暗号化

## Azure 可用性セットに対するサポートの強化

可用性セットに対するサポートの強化により、以下が実現します。

- クラウドテンプレート内で既存の可用性セットを再利用
- 可用性セットをオプションとして、リソースを可用性セットの一部にしない

## Ansible の機能強化

- 以前は、マシンが vRA によってプロビジョニングされる場合、Ansible Tower ではホスト名ではなくマシンの IP アドレスが追加されていました。今後はホスト名が Ansible Tower の `ansible_host` 変数に追加されます。ホスト名または FQDN 文字列をクラウドテンプレートから Ansible Tower に渡すことができます。
- 新しい Ansible Tower ブループリント プロパティ `maxJobRetries` により、Ansible Playbooks を再試行します。
- Ansible Tower 統合からワークフロー テンプレートを呼び出すことができます。
- Ansible とユーザー アカウントの実行が統合されます。
- Ansible オープン ソースで、vRA は IP アドレスでなくホスト名を使用してサーバを作成します。
- ブループリント YAML から Ansible Tower に追加の変数を渡すことができます。
- Ansible Tower 統合の [制限] における [起動時にプロンプトを表示] を更新してデフォルト値を使用します。

## Puppet の機能強化

- ブループリントに含まれるユーザー定義のプロパティを、実際の値としてエージェント ノードの Puppet マスターに渡します。
- マスターの PE マスターを指定します。

## イベント ブローカの機能強化

プロビジョニング後のステージおよびパワーオン前にサブスクリプションを追加する機能。

## SaltStack SecOps : インターネット セキュリティ コンテンツ向けの SLES 15 Center

- SLES 15 オペレーティング システムで、誤ったコンプライアンス設定をスキャンして特定する機能
- 特定されたコンプライアンスの問題を修正する機能

## 米国以外の各国で vRA STD + および SaltStack SecOps アドオンをリリース

- 2月に輸出コンプライアンスの承認が得られたことで、vRA STD + と SaltStack SecOps の両製品とも米国外で入手可能

### SaltStack Config

- VMware Lifecycle Manager を使用して SaltStack Config ライセンスを適用する機能を提供します。
- vRealize Automation クラウドテンプレートを使用して SSC ミニオンを展開する機能を提供します。
- SaltStack Configure が FIPS 準拠になりました。
- 展開時に FIPS モード（有効または無効）を決定します。

### ITSM プラグイン

- カスタム リソースを持つカタログ アイテムをサポート（vRO オブジェクト用を除く）します。
- カスタム Day 2 アクションでカタログ アイテムをサポートします。
- ServiceNow で、編集ボックスとドロップダウンの追加によって vRA カタログをカスタマイズできます。
- スクリプトをこれらのフィールドに追加して添付することができます。
- ServicePortal で [展開の詳細] が利用可能になりました。

### vRA プラグイン

vRealize Automation 用 VMware vRealize Orchestrator Plug-in により、vRealize Orchestrator と vRealize Automation の間の連携が可能です。

プラグインに付属している、特別な設定が不要なワークフローにより、vRealize Automation でのリソースの展開と管理を自動化して実行することができます。これらのワークフローのほかに、カスタム ワークフローを作成して実行できます。vRO に新たに提供されたコンテンツは vRA 8.x と互換性があり、ユーザーの主なユースケースを解決して、プロジェクトおよびユーザーの管理、カスタム タイプの使用、仮想マシンの管理など、vRA の主要機能のワークフローを作成して実行します。

vRA のオンプレミスと vRA クラウドに同じプラグインを適用できます。

#### vRA プラグイン フェーズ 1 :

- オンプレミスおよびクラウドの vRA ホストのホスト管理および CRUD 操作
- 特別な設定が不要な、ホスト管理用ワークフロー



- ホストへの認証を保持し、それをオンザフライで使えるよう動的にホストを作成
- REST クライアントを使用でき、vRA への要求が可能

vRA 8.4 オンプレミスでは、プラグインは vRA に組み込まれる vRO とともに事前にインストールされます。

プラグインは vRA バージョン 8.3 でサポートされますが、手動でダウンロードしてインストールする必要があります。

外部 vRO の場合は、手動でダウンロードしてインストールする必要があります。

vRA クラウドの場合は、マーケットプレイスからプラグインを手動でダウンロードしてインストールする必要があります。

## ABX のスケーリング

ABX アクションを実行するときに、物理インフラストラクチャの制限を超えないように Kubernetes ポッドを再利用できます。また、ABX アクションのスケジュールを vRA クラスタ全体で設定することで、同時実行される ABX アクションの数を増やすこともできます。

## GCP Sole テナント

カスタム プロパティを設定して、GCP の単一テナント機能（専用ホスト）を利用できるようになりました。

## vRA 8.x にオンボーディングしている vRA 7.x ワークロードの IP アドレス管理登録

vRA 7.x の一部であるリソースを v8 にオンボーディングすると、それらのワークロードの IP アドレス管理登録が更新されます。これにより、IP アドレス管理プロバイダでの割り当ての重複を回避できます。また、ワークロードが削除されると IP アドレスは解放されてプールに戻されます。

## アクセス トークン API の動作の変更

/csp/gateway/am/api/login?access\_token API の動作が変更されました。

この API は、API 統合のアクセス トークンを取得する 2 段階のプロセスの最初の手順で使用されます。この API を使用する正しい方法は、

<https://code.vmware.com/docs/10222/vrealize-automation-api-programming-guide--html-/GUID-AC1E4407-6139-412A-B4AA-1F102942EA94.html> に記載され、vRA 8.0.1 から変更されていません。以前は、この API から返されるアクセス トークンは vRA に完全に登

録されておらず、いくつかの API で使用できませんでした。混乱を避けるために、現在、この API は、プロセスの 2 番目の手順で使用する更新トークンのみを返します。

## IaaS API エンドポイントの展開の強制的な削除

展開を削除するために、IaaS API エンドポイントに強制削除機能を追加しました。このオプションは、「forceDelete」クエリ パラメータとともに使用されます。

「forceDelete」が true の場合は、展開とすべての関連リソースの削除がベスト エフォートで実行されます。これを使用する際は、場合によってはプロビジョニング済みのインフラストラクチャ リソースが残り、ユーザーが手動で削除する必要があることに注意する必要があります。

「forceDelete」が false の場合は、標準の削除アクションが実行されます。

## はじめに

サポート ドキュメントで製品について理解しておく必要があります。

- [vRealize Easy Installer を使用した vRealize Automation のインストール](#)
- [vRealize Automation でのユーザーの管理](#)
- [vRealize Automation 移行ガイド](#)

vRealize Automation をインストールしてユーザーを設定した後、含まれている各サービスについて、[スタート ガイド](#)と[使用と管理ガイド](#)を参照できます。[スタート ガイド](#)では、エンドツーエンドの事前検証について説明しています。[使用と管理ガイド](#)では、使用可能な機能の検証をサポートする詳細な情報を提供しています。[vRealize Automation 8.4 の製品ドキュメント](#)には、その他の情報も記載されています。

- [vRealize Automation Cloud Assembly スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Cloud Assembly の使用と管理](#)
- [vRealize Automation Code Stream スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Code Stream の使用と管理](#)
- [vRealize Automation Service Broker スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Service Broker の使用と管理](#)

vRealize Orchestrator 8.4 の機能と制限事項については、「[vRealize Orchestrator 8.4 リリースノート](#)」を参照してください。

## API ドキュメントとバージョン管理

製品で API ドキュメントを利用できます。1 つのランディング ページからすべての Swagger ドキュメントにアクセスするには、

`https://<appliance.domain.com>/automation-ui/api-docs` にアクセスします。

`appliance.domain.com` はご使用の vRealize Automation アプライアンスです。

API の使用事例については、『[vRealize Automation 8.4 API プログラミング ガイド](#)』を参照してください。

API を使用する前に、本リリースでの API の最新の更新や変更を考慮し、使用する API サービスの応答への変更の有無に注意します。

サービス名	サービスの説明	API の更新点と変更点
iaas-api	この API には、インフラストラクチャの設定、リソースの反復的な検証およびプロビジョニングなど、プロビジョニングサービスに固有のすべての機能が含まれています。	変更なし
project-service	この API には、プロジェクトの作成、管理、削除に関連するすべての機能が含	変更なし

サービス名	サービスの説明	API の更新点と変更点
	まれています	
blueprint-service	この API には、作成、検証、プロビジョニングなど、ブループリント サービスに固有のすべての機能が含まれています。	<p><u>新しいエンドポイント</u></p> <p>なし</p> <p><u>新しいパラメータ：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• GET /blueprint/api/blueprints/{blueprintId}/inputs-schema</li> <li>• GET /blueprint/api/blueprints/{blueprintId}/versions/{version}/inputs-schema <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 新しいパラメータ：maxProperties</li> <li>◦ 新しいパラメータ：minProperties</li> </ul> </li> <li>• POST /blueprint/api/blueprint-validation <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 新しい申請パラメータ：blueprintVersion</li> </ul> </li> </ul>
relocation-service	再配置サービスは、管理下のクラウドから既存の仮想マシンを取り込むポリシーとプランを定義するために使用します。	変更なし
migration-service	このサービスは、構成ファイルの情報に基づいて vRA 8 インスタンスを迅速にセットアップするために使用します（別名：	変更なし

サービス名	サービスの説明	API の更新点と変更点
	Zero-Setup)	
cgs-service	Content Service API は、外部コンテンツソース (SCM プロバイダや VMware Marketplace など) の Infrastructure as Code コンテンツに接続するために使用します。	変更なし
form-service	Service Broker および Cloud Assembly VMware サービスの動的なフォームのレンダリングとカスタマイズ動作を定義します。	変更なし
展開	この API は、システムに展開された展開オブジェクトおよびプラットフォーム/ブループリントへのアクセスを	変更なし

サービス名	サービスの説明	API の更新点と変更点
	提供します。	
承認	申請をプロビジョニングする前に展開または Day 2 アクションに同意する必要があるユーザーを制御するポリシーの適用	変更なし
リソース割り当てポリシー - アグリゲータ サービス	承認コンテナ内で実行される新しいサービスです。  これらの API により、組織、ユーザー、プロジェクトの各レベルでリソース使用量メトリックにアクセスして確認できます。	新しいエンドポイント <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>/aggregator/api/metrics</code> アグリゲータ サービスの登録済みメトリックを返します</li> </ul>
ブロックデバイスのスナップショット作成 - プロビジ	この API は、ブロック デバイスのスナップショットを作成するた	既存の API に対する変更は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>POST /iaas/api/block-devices/{id}/operations/snapshots</code></li> </ul> 各クラウドアカウントでスナップショットのプロパティが異なるため、スナップショットの作成時に入力プロパ

サービス名	サービスの説明	API の更新点と変更点
ヨニングサービス	めに使用されます。	<p>ティを取得するための新しいプロパティ Map を追加しました</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>GET /iaas/api/block-devices/{id}/snapshots/{id1}</li> </ul> <p>スナップショット応答モデルにプロパティ Map を追加しました。API 応答には、次の変更が行われています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新しいキー/値フィールドとして snapshotProperties が追加されました</li> <li>isCurrent フィールドは廃止されました</li> </ul>
Azure ストレージプロファイルの作成 - プロビジョニングサービス	この API は、Azure ストレージプロファイルの作成に使用されます	<p>既存の API に対する変更：</p> <p>POST /iaas/api/storage-profiles-azure</p> <p>Azure ストレージプロファイルの作成時に使用可能な新しいプロパティ diskEncryptionSetId を追加しました。</p>
マシンへのブロックデバイスの接続 - プロビジョニングサービス	この API は、既存のディスクを既存のマシンに接続するために使用されます	<p>既存の API に対する変更：</p> <p>POST /iaas/api/machines/{id}/disks</p> <p>2 つの新しいパラメータを追加しました</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>scsiController : SCSI コントローラ ディスクを接続する SCSI コントローラの名前。次の 4 つの値を使用できます SCSI_Controller_0、SCSI_Controller_1、SCSI_Controller_2、SCSI_Controller_3</li> <li>unitNumber : 0 ～ 15 の任意の値</li> </ul>
Code Stream のすべてのパイプラインサービス	これらの API は、Code Stream サービスへのアクセスを提供します。	変更なし

VMware では、多様性の受け入れを尊重しています。この原則をお客様、パートナー、社内コミュニティ内で共有するために、当社では当社ドキュメント内の多様性の受け入れにふさわしくない言葉遣いを削除しました。

新しいアップグレードバンドルを使用して vRealize Automation 8.4 にアップグレードした場合、スケールアウト時にエラーが表示されることがあります（パッチ適用環境と同様）。[KB79105](#) に記載されているように、ova バンドルは my.vmware.com でホストされています。

vIDM 3.3.3 は、組み込みの Linux コネクタを使用した IWA（統合 Windows 認証）をサポートしていません。外部 Windows コネクタで LDAP または IWA を使用している vRA 8.x のユーザーは、影響を受けません。詳細については、ナレッジベースの記事 [KB82013](#) を参照してください。

## Azure VMware Solution と Google Cloud VMware Engine のサポート

vRealize Automation Cloud は、Microsoft Azure および Google Cloud Platform 上の VMware のホスト型クラウドソリューション（Azure VMware Solution (AVS) および Google Cloud VMware Engine (GCVE)）で動作することがテストおよび認定されています。AVS または GCVE で実行されているワークロードは、vCenter Server と NSX-T のクラウドアカウントの設定後、vRealize Automation Cloud によって管理されます。詳細については、[Azure VMware Solution のドキュメント](#) および [Google Cloud VMware Engine のドキュメント](#) を参照してください。

## vRealize Automation 8.4 へのアップグレード

VMware vRealize Suite Lifecycle Manager を使用して、vRealize Automation 8.x インスタンスを 8.4 にアップグレードできます。詳細については、「[vRealize Suite Lifecycle Manager および vRealize Suite 製品のアップグレード](#)」を参照してください。

## 解決した問題

- 評価サービスの **Swagger** を使用できない

評価サービスの Swagger ページを使用できません。

- オブジェクトタイプスキーマでプロパティが定義されていない場合、入力ダイアログで例外が発生する



入力プロパティがオブジェクトタイプで、プロパティが json スキーマで定義されていない場合は、ブループリントのテストまたは展開ダイアログで入力ダイアログがロードされません。

- 入力配列フィールドを使用した展開時に値を送信できない

ユーザーは入力フォームの値を入力することができますが、ユーザー インターフェイスはテスト/展開ダイアログで null の配列をブループリント サービスに送信します。

- API を使用すると、重複するアクション/権限を持つ Day 2 ポリシーを作成できる

API を使用して重複するアクション/権限を持つポリシーの作成を試みると、システムによる検証チェックが実行されないままポリシーが作成されます。

注：ユーザー インターフェイスを使用してポリシーを作成する場合は、ドロップダウンで重複選択エントリが表示も許可もされないため、これは発生しません。

- 更新トークンのみを返すように /csp/gateway/am/api/login?access\_token を変更

/csp/gateway/am/api/login?access\_token API の動作が変更されました。この API は、API 統合のアクセス トークンを取得する 2 段階のプロセスの最初の手順で使用されます。vRA 8.0.1 以降、この点は同一です。以前は、この API から返されるアクセス トークンは vRA に完全に登録されておらず、いくつかの API で使用できませんでした。混乱を避けるために、現在、この API は、プロセスの 2 番目の手順で使用される更新トークンのみを返します。

## 既知の問題

このリリースには、次の既知の問題があります。

- Easy Installer からの新規セットアップ時に vRA の展開の初期化に失敗する

Easy Installer または vRealize Suite LCM からの新規セットアップ時に、vRA の展開（単一またはクラスタ）に失敗します。  
LCM に表示されるエラーは LCMVRVAVACONFIG590003 です。

回避策：vRealize Suite LCM 内からクラスタの初期化を再試行します。

- **オンボーディング画面にアクセスできない**

[Cloud Assembly] -> [インフラストラクチャ] でオンボーディング画面に移動すると、302 ステータス コードが返される場合があります。これは、長時間ログインしている場合に発生することがあります。

回避策：ログアウトしてから、再度ログインします。

- **vCenter Server クラウド アカウントが更新されてデータセンターが追加された場合、このデータセンターのリソースをただちに使用できない**

vCenter Server クラウド アカウントのリージョン（データセンター）に加えられた変更はただちに反映されないため、データ収集の実行が必要です。

回避策：次のデータ収集が正常に完了するまで待機します。データ収集は約 10 分ごとに実行されます。

- **PowerShell タスクが停止しているように表示される**

アクティブなセッションがない場合、PowerShell タスクが停止しているように表示されます。この動作は、ユーザー スクリプトを実行する PowerShell プロセスが Windows システム プロセス WmiPrivSE によって保持されているために発生します。

回避策：システムにログインし、アクティブなセッションを維持します。完全にログアウトするのではなく、画面をロックします。

- **vRO が、配列型を「type.isMultiple」が true のフィールドではなく、1 つの列のみの複合型として表す**

配列入力を含むワークフローを追加してそのフォームをカスタマイズする場合は、データ グリッドの [値] タブで列の ID を変更しないでください。デフォルト値は、\_column-0\_ の設定のままにしておく必要があります。一方、データグリッドに値を追加するとユーザー インターフェイスに表示される列のラベルは変更できます。

- **ライセンスの再構成がサポートされない**

Enterprise ライセンスを使用して vRealize Automation を構成した後は、Advanced ライセンスが使用されるようにシステムを再構成することはできません。

- **vRealize Automation 8 では Internet Explorer 11 がサポートされない**

Internet Explorer 11 は vRealize Automation 8 で使用できません。

回避策：Internet Explorer 11 以外のブラウザを使用します。

- **カスタム リソースが変更または削除された後に、ブループリント キャンバスが更新されない**

カスタム リソースを削除しても、その変更はブループリント キャンバスにただちに反映されません。

回避策：キャンバスにはキャッシュ メカニズムがあり、検索ペインの横にある [更新] ボタンを使用して更新できます。

- **vRO オブジェクト タイプが同一の異なるカスタム リソースの作成はサポートされない**

vRA 7.x では、同じタイプの異なるカスタム リソースを作成できました。これにより、ユーザーは、同じ vRO タイプで作成/削除/操作アクションの異なるセットを、異なるカスタム リソース タイプの作成で定義することができました。vRA 8.x では、異なるカスタム リソースから同じ vRO\_Type を利用できるケースはサポートされていません。

- **リファレンス タイプへの空の入力があると、カタログを使用して vRO ワークフローが実行されない**

リファレンス タイプのワークフロー入力に対して、空の値で vRO ワークフローを申請すると、Null ポインタ例外が表示されます。

回避策：フィールドを必須にするか、またはリファレンス タイプのデフォルト値を設定します。

- **プロビジョニングに失敗したカスタム リソースを展開から削除できない**

カスタム リソースを申請すると、リソースを作成するワークフローの実行が失敗した場合でも、展開サービス内のリソースは作成されています。これは最初の申請に「開始済み」のステータスで応答し、展開にリソースを作成しているため

です。このリソースには、vRO でのリソースのプロビジョニングに成功したときに追加されるメタデータが含まれていないため、削除できません。

回避策：カスタム リソースの削除を最初に試行した直後に、強制的に削除するかどうかを尋ねるダイアログが表示されます。[はい] を選択すると、カスタム リソースが強制的に削除されます。

- カスタム リソース名が展開ビュー リストに正しく反映されない

vRO\_Type に基づいてカスタム リソースを作成する場合、通常は包括的な表示名を使用します。現在、この表示名は展開ビューでは使用できません。展開に表示されるリソースは、そのタイプによってのみ識別されます。

- vCenter Server マシンのコンソール ウィンドウからタイムゾーンを設定する場合に使用可能なオプション

vCenter Server マシンのコンソール ウィンドウからユーザーがタイムゾーンを設定したときに未定義の動作になります。

回避策：タイムゾーンは変更しないでください。

- テナント名で大文字と小文字が区別されない

vmware という名前のテナントと VMware という名前の別のテナントが同じテナントとして認識されます。

回避策：vRA 8.x のテナントはホスト名に基づいているため、テナント名は大文字と小文字が区別されません。したがって、VMware という名前のテナントは VMWARE、vmware などの大文字と小文字の任意の組み合わせの名前のテナントと同じとみなされます。テナント名の大文字と小文字は異なる場合があります。ため、アプリケーション全体で保持されない場合があります。

- OGNL 式による vRO ワークフローの表現が、vRA のカスタムの Day 2 操作で使用した際に適切にレンダリングされない

表現に OGNL 制約を持つワークフローを含むカスタム リソース アクションが適切にレンダリングされず、一部の必須フィールドに値をポピュレートできないことがあります。

- コスト/価格設定の機能が共有インフラストラクチャのマルチテナントで動作しない

テナントがインフラストラクチャ リソースを共有できるマルチテナント展開に対して価格設定機能が構成されている場合は、報告される結果が正確でないことがあります。これは、価格設定機能がマルチテナントを認識していないためです。価格は、vROps が追加され、展開が作成された組織に対してのみ計算されます。

- **vSphere クラスタで DRS が無効になっていると vSphere/NSX-V クラウド アカウントでの割り当て中に、既存のネットワークを使用した展開が失敗する**

ネットワーク プロファイルで NSX-V ネットワークを選択し、既存のネットワークを使用する展開を申請すると、割り当て中に展開が失敗し、次のメッセージが表示されます。「コンピューティング...とネットワーク構成...に共通の配置が見つかりません」。これは、DRS が無効になっているクラスタが vCenter Server に含まれている場合に発生します。

回避策：クラスタで DRS を有効にし、クラスタが vRA クラウドゾーンに含まれるようにするか、ネットワーク プロファイルで vSphere ネットワークを選択してください。

- **Service Broker のフォームに、vRO ワークフローの入力で設定されたデフォルト値がポピュレートされない**

vRO ワークフローで文字列の入力にデフォルト値が設定されている場合、Service Broker からワークフローを開始しても、申請フォームにデフォルト値が自動的に反映されません。

回避策：Service Broker のカスタム フォームを使用して、指定されたデフォルト値を設定してください。

- **Service Broker は、文字列フィールドの valueList にアクションが設定されている vRO ワークフローをインポートできない**

アクションによって値が入力される valueList を含む文字列フィールドのスキーマは、Service Broker では解析してインポートすることができません。

- **プロキシの背後にある Docker イメージをプルする場合に追加の構成が必要になる**

ABX サービスは、一般公開されているインターネット リポジトリからコンテナ イメージをプルします。公開サイトへの送信トラフィックが許可されない隔離さ

れたネットワークに vRA を展開した場合は、HTTP プロキシを構成する必要があります。vRA 8 では CLI を使用してプロキシ構成を有効にできますが、ワークフローには、Docker サービスの自動セットアップが組み込まれていません。

回避策：この構成は、個別に行う必要があります。ナレッジベースの記事は未定です。

- クラウドテンプレート申請フォームで **anyOf** 型の複合オブジェクトがサポートされない

フォームに複合オブジェクトの **anyOf** プロパティが含まれている場合、**anyOf** は、入力を検証する制約のセットではなく、文字列のドロップダウンとして表示されます。

回避策：anyOf 値ではなく列挙型を使用します。

- **vRealize Orchestrator** または **vRealize Automation 8.3** にアップグレードすると、**vRealize Orchestrator** クライアントの一部のリソース要素が変更、または以前のバージョンに戻ったように見えます。

vRealize Orchestrator または vRealize Automation 8.3 にアップグレードすると、vRealize Orchestrator クライアントの一部のリソース要素が変更、または以前のバージョンに戻ったように見えます。この問題は、過去に vRealize Orchestrator クライアント内で別のソース ファイルを使用して更新されたリソース要素で発生します。vRealize Orchestrator または vRealize Automation の展開をアップグレードした後、これらのリソース要素を以前のバージョンで置き換えることができます。これは断続的に発生する問題です。

回避策：

1.vRealize Orchestrator クライアントにログインします。

2.[アセット]>[リソース]の順に移動します。

3.この問題によって影響を受けるリソース要素を選択します。

4.[バージョン履歴] タブを選択し、要素を適切なバージョンに戻します。

5.影響を受けるすべてのリソース要素について、この手順を繰り返します。

- **vRA** を **vRA 8.0/8.1/8.2** から **8.3** にアップデートし、プロジェクト用に **Active Directory** を構成すると、展開が失敗し、次のエラー メッセージが表示されま

す。「**Active Directory** でコンピュータ オブジェクトを正常に作成できませんでした」。

vRA 8.3 では、Active Directory レコードの作成に使用される AD スクリプトが更新されており、ブループリントで設定された **relativeDN** の値をオーバーライドすることができます。新しいスクリプトを展開するには、アップグレード後に vRA で既存の Active Directory 統合を再検証する必要があります。

回避策：ユーザー インターフェイスで Active Directory 統合アカウントを再検証します。

- **FIPS モードが有効な場合、高負荷条件下で Code Stream ポッドが再起動する**

FIPS モードを有効にした状態で多数の同時実行パイプラインを実行すると、メモリ使用量が事前設定された制限の 2.5 GB を超えるため、Code Stream ポッドが再起動します。

回避策：

FIPS モードを有効にした状態で、Code Stream ポッドのメモリ制限 を 3 GB に増やします。

1.SSH でノードに接続します。HA セットアップの場合は、任意のノードに SSH で接続します。

2.現在のポッド メモリ制限を確認します。 **kubectl -n prelude describe deployment codestream-app**

3.制限が次のように設定されていることを確認します。Limits: memory: 2500M

4.展開の YAML を編集します。 **kubectl -n prelude edit deployment codestream-app**

5.メモリ制限を増やし、制限が次のように設定されていることを確認します。Limits: memory: 3000M6

6.Code Stream ポッドが再作成されます。

- **Mozilla Firefox v84** を使用してパッケージをエクスポートすると、生成されるファイルの拡張子が **.package** ではなく **.zip** になり、vRO にインポートできない

MacOS 10.15 で Firefox 84.0.2 を使用してパッケージをエクスポートした場合は、パッケージは **.zip** ファイルとして保存されます。

回避策：

- Google Chrome または別のバージョンの Mozilla Firefox を使用します
- ファイル拡張子を .zip から .package に変更します

注：macOS では、Finder アプリケーションは既知の形式から不明な形式へのファイル形式の変更をサポートしていないため、ターミナルからファイルを変更します。

- **vRealize Automation** カスタム リソースによってトリガされるワークフロー「**Software-Install-Base**」を介して仮想マシンでローカル スクリプトを実行すると、「同じキーを持つ次のアイテムがすでに追加されています。キー：**LinkedView**」というエラーが表示されて展開が失敗する場合があります。

*DynamicTypes:CustomScript.Script* という動的タイプの vRO ワークフロー「**Software-Install-Base**」を参照するカスタム リソースを介してローカル スクリプトを実行するように vRealize Automation ブループリント（またはクラウドテンプレート）が設定されている場合、展開は失敗します。

回避策：SaltStack サーバを立ち上げてローカルのマシンでスクリプトを実行するか、cloud-init、ABX、Code Stream など、ローカルでスクリプトを実行する他の方法を使用します。

- 単一ノードのインストール後、RaaS ログに次のようなエラーが記録される：**No such file or directory.Additionally, ctypes.util.find\_library() did not manage to locate a library called '/var/lib/raas/unpack/\_MEIuxtdsP/Cryptodome/Util/../Cipher/\_raw\_des.so'.**

このエラーはインストール時にのみ発生し、ログには 1 回記録されます。

回避策：RaaS への影響はありません。そのため、追加のアクションは不要です。

- マシン作成 API では、作成するマシンにディスクを接続するために指定した **scsiController** および **unitNumber** が無視される

/iaas/api/machines API を使用してマシンを作成すると、scsiController と unitNumber を使用してディスクが接続されます。現在、この API ではマシンの作成とディスクの接続が行われますが、ユーザー入力は無視され、指定された scsiController および unitNumber は使用されません。

回避策：別途、接続 API で scsiController および unitNumber を使用してディスクを接続します。



